

看護とリハビリの連携で 訪問看護ステーションすこやか うまいなあ…水が飲めた

道東勤医協 友の会ニュース

発行所
道東勤労者医療協会
釧路市治水町3番5号
☎(0154)25-6479
発行責任者
吉野和彦
年間200円 毎月1日発行



五月から、「訪問看護ステーションすこやか」に言語聴覚士が配属となり、在宅でのリハビリテーションの強化が期待されています。
看護師と言語聴覚士の連携で、経口での摂食が回復できた患者さんを紹介します。

「魚も卵もうまいなあ」リハビリが意欲を引き出し、食事をとることが笑顔をよくします

私たちはWさんの意欲を引き出すことが大切と考え、本人が好きな演歌にあわせて、硬くなった関節をやらせ、腕を伸ばし、呼吸器の訓練や嚥下体操、口腔ケアを行ないました。

Wさん(七十六歳)は、市内A病院に入院中、心臓病が悪化し食欲低下のために胃ろう(管を通して胃の器具を腹部に取り付けること)を造設し、退院となりました。訪問看護ステーションから経管栄養の管理、リハビリなどを目的に週二回訪問することになりました。はじめの頃のWさんは、意欲がまったく感じられず、唾液の分泌低下で口腔内の乾燥が強く、不衛生な状態でした。



音楽療法や嚥下体操で 意欲を引き出して 田辺ひとみ看護師

このリハビリをはじめ五ヶ月頃から唾液の分泌が回復し、「水が飲みたい」と伝えてくるようになりました。

「うまいなあ、 魚も卵も大好きだ」

言語聴覚士からは、「トロミをつければ水の摂取は可能」との評価で、Wさんは一年半ぶりに水を飲むことができました。念願がかなったせいか、笑顔が増え、会話も多くなり、「卵が好きだ。また、食べてみたい」と何度も訴えるようになりました。

リハビリを続ける中で、Wさんはミキサー食をゼリー状に固めると何でも食べられるところまで飲み込みができるようになっていきます。「うまいなあ、これ、なんていう魚？」など、うれしさをかみ締めるようになりました。

摂食・嚥下動作は、総合的な リハビリテーション

佐々木礼朗言語聴覚士



口腔リハビリとして、口腔・顔面体操(唇、頬など顔の筋肉を動かすことで、

した。Wさんの水飲み欲求は強く、歯磨後のうがいの水を飲み込んでしまうほどでしたが、ご家族は誤嚥を心配されたこともあり、言語聴覚士に専門的な立場からアドバイスを求めました。

やすくなり、乾燥が軽減されます。口から食べることは、きわめて日常的な行為です。食べ物を食べるときは、色や形だけでなく、香りや見た目、盛り付けなど五感の

すべてを働かせます。摂食・嚥下動作は、さまざまな知覚・感覚・運動機能を使いますので、一日一回少量の食事でも立派なリハビリテーションになります。

患者さん、ご家族とともに 進めるリハビリテーション



Wさんから「水が飲みたい」と欲求があり、専門的な立場から本人の「嚥下機能の評価」を行ない、機能回復のための顔面や舌の体操、喉のまわりの飲み込みをささえる筋肉をきたえる訓練などを提案しました。口の中に冷やしたスプーンを入れて刺激を与え、舌を動かす舌の動きがよく、言葉をはっきり発音するの役に立ちます。

法での脳活性化や口腔ケアなどを行なってきた看護師さんの努力が基礎にあります。言語聴覚士のかかわる分野は、言語、嚥下、聴覚、音声障害など広範囲です。訪問看護ステーションに配属されたことで、看護師さんとの連携をいっそう強めながら、さまざまな患者さんの機能の維持・回復の支援に努めていきたいと思えます。